

都市空間における行為を誘発するデザインの研究  
— 滞留行為をアフォードする街路空間の可能性について —

建築学専攻  
プロジェクトデザイン研究

DZ20031 岡本 空都

指導教員 岡野 道子

## 序章 はじめに

### 0-1. 研究背景

現代の都市空間では、移動や消費を優先した効率化された設計が進み、歩行者が一息つける「ちょっとした居場所」や滞留を許容する余白が不足している。一方で、段差やフェンス、縁石などの些細な工作物が、座る・寄りかかるといった行為を自然に誘発している例も多い。これらは本来の用途を超え、身体的感覚に基づくアフォードンスによって柔軟に使われている点に特徴がある。このような観察から、人の身体的・心理的欲求に寄り添った設えを街中に施すことで、滞留の場を生み、人と都市の関係を再構築し、都市空間をより柔軟にできる可能性がある。

### 0-2. 研究目的

本研究は、街路空間における人の滞留行為（休息・停止）に着目し、アフォードンス理論を用いてその成立要因となる空間の構成要素を分析・検証するものである。さらに、それを元に滞留を促す仕掛けを施した新たな居場所を提案し、自発的な滞留行為を生む空間を都市に増やすことで、人中心で柔軟な都市空間の実現を目指す。

### 0-3. 研究手法

第1章では、アフォードンス理論の概要について振り返り、都市空間での滞留行為との関係性について論じる。第2章では、キャットストリートを対象敷地として、滞留行為が行われる空間をマクロの視点から調査・分析する。第3章では、第2章で明らかになった滞留空間における滞留行為をミクロの視点から調査・分析を行い、滞留行為が行われる要素や周囲の環境を考察する。第4章では、前章までの分析と考察をもとに街中において人が自発的に滞留行為を行う助けとなるような居場所の設計・製作を行う。第5章では製作した空間を安全面に配慮した上で、利用状況を調査する。そして、製作物が利用者や周囲にどのような影響を与えるのかを考察し、本研究の考察と今後の課題について論じてまとめる。

## 第1章 アフォードンス理論と都市空間における滞留行為の理論的考察

### 1-1. アフォードンス理論の概要と都市空間への応用

アフォードンスという概念は、知覚心理学者ジェームズ・J・ギブソン (James J. Gibson) によって提唱された。彼の著作物によると、「環境が生物に対して提供する行為の可能性」と定義されている。

例えば、椅子という対象は単なる物理的形態ではなく、「腰をかける」という行為を自然に促す性質を有しており、これこそがアフォードンスの例である。

ギブソンの理論の核心は、環境と行為主体（人間や動物）との相互的な関係性に着目している点にあり、それを知覚する者との関係によって立ち現れる可能性である。たとえば、岩は成人にとっては「腰掛ける」

対象になり得るが、幼児にとっては「登る」対象となるように、アフォードンスは行為者の身体、知覚の仕方、文化的な背景などによって異なる様相を持つ。

都市空間においてもアフォードンス理論は応用されており、近年では「行為を誘発するデザイン」や「利用者の自発的な使い方を許容する場の設計」として注目されている。

### 1-2 都市空間における滞留行為の特性

都市空間における人々の行動は、単なる「移動」だけでなく、「立ち止まる」「座る」「寄りかかる」など、様々な「滞留行為」を内包している。これらの行為は、空間に存在する物理的な環境要素との相互作用によって誘発され、そこには人々の身体的感覚や心理的欲求が密接に関係している。さらに、滞留行為は、空間に潜在するアフォードンスを読み取り、行動へと転化する過程で生じる現象であり、都市空間の豊かさ評価する上で重要な指標である。また、都市空間での滞留行為は、大まかにいくつかのタイプに分類することができ「立ち止まる」「寄りかかる」「腰をかける」といった姿勢と「喫煙する」「休憩する」「調べる」といった行為が合わさってきている。

また、都市空間の中には稀に視点を変えたり、工夫を施すことで、その空間を自分なりに解釈し柔軟に滞留行為を行なっている例も見られた。このような利用者が自発的に滞留行為を行えるような空間を都市の中に増やすことを目指す。

## 第2章 都市空間における滞留行為のマクロ的分析

### 2-1. 調査概要・対象敷地

本調査では、主に都市での人の滞留場所とその周囲の空間との関係、行われている滞留行為について明らかにするために、滞留行為の分布状況をマクロスケールから、調査を行う。対象敷地の選定については滞留行為が行われている空間の研究を行う上で、様々なパターンの滞留行為が観測できることが望ましいと考えた。そのため、人々の姿が多く見受けられる賑わいのあるエリアであり、かつ歩行可能な街路空間を有するエリアである渋谷と原宿を結ぶキャットストリートを選定する。

### 2-2. 調査手法

本調査では都市空間の中での人々の滞留空間と、そこでの滞留行為、また、周囲の空間との関係性について明らかにすることを目的に敷地であるキャットストリートとその周辺の街路空間上での滞留行為を観測する。そしてまずは、滞留行為の分布状況と都市空間の中の滞留場所を明らかにするために滞留者を観測し、図1のように地図にプロットする。また、観測時に滞留時の体勢と行為の種類にも注意し並行して図2のように分類を行う。

調査はマップを携帯しながら、キャットストリートやその周辺を歩行し、滞留者を目視で確認しマップに直接プロットする形で進めた。調査日時としては、より多くの滞留行為を観測するために晴れの日

に限定し、その上で平日、休日の朝（9:00～）、昼（13:00～）、夕（17:00～）の計6回調査を行った。



図1. 調査マップ（筆者作成）

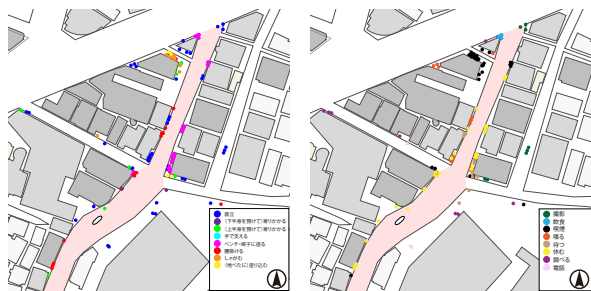


図2. 滞留中の体勢、行為分類記入例（筆者作成）

### 2-3 調査結果・分析

地図にプロットを行った調査の結果を1つの地図にまとめ、10人以上の人が集まった場所を人が滞留しやすい場所として、記録すると41箇所の空間が明らかになった。また、本研究を行う上で、体勢の種類が1種類のみ場所は25箇所あり、これらの空間は利用者の滞留中の体勢を限定してしまっており、多様な使われ方をされていないため、柔軟性の低い空間だと考えられる。

## 第3章 滞留行為を誘発する空間要素のミクロ的分析

### 3-1. 調査概要

本調査では、第2章で明らかになった、人が滞留しやすい場所に絞って、身体を支持している工作物の情報や周囲を取り巻く空間の構成要素と滞留時の身体の情報などをミクロスケールから見ていき、滞留行為が起こっている空間を分析する。そして、滞留行為をアフォードしている要素を抽出する。

### 3-2. 調査手法

第2章で明らかになった滞留箇所調査を行い、図3のようにまとめ、それらの分析を行う。滞留箇所については、第2章で明らかになった41箇所の滞留空間の内、多様な使われ方をされている柔軟性の高い空間である16箇所の空間に絞って調査を進めることが望ましいと考えたため、これらの空間に絞ってミクロな視点での分析を進める。

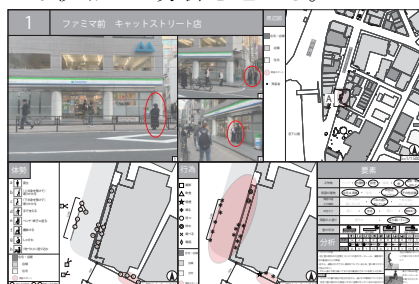


図3. 調査シート（筆者作成）

### 3-3. 調査結果・分析

本調査によって、滞留しやすい空間の特徴として、「人の流れに対して逃げ込めるような場所にあること」、「滞留中に周囲からの視線を都市工作物などによって遮ることや滞留中の体勢の変化によって通行人との視線関係を緩和することができる」、「多様な体勢で滞留できる空間」などがわかった。さらに、「自分の体格に合わせた使い方ができる空間」、「1人でも、複数でも滞留することができる空間」といった特徴がある空間は、滞留中の体勢や行為の種類も比較的多く、柔軟な空間になっていることがわかった。

## 第4章 設計・製作

### 4-1. 敷地選定

設計を行う対象敷地を決めるために、第2章での調査を元に「滞留箇所にはなっていないが、比較的滞留者が多い空間（滞留者が7人以上10人未満ほど）」、「滞留行為と直接的に結びつくようなモニュメント的要素がない空間（コンビニの前やベンチなど人が集まりやすい物がない）」、「滞留中の滞留体勢の種類が少ない空間」、などの特徴を持つ空間を導き出した。本研究では、三井のリパーク神宮前6丁目の駐車場前を対象敷地に選定した。



図4. 対象敷地

### 4-2. 設計方針

設計方針としては、第3章で導き出した滞留しやすい空間の特徴を踏まえた上で、現在滞留空間になっていない空間をより柔軟で多様な使われ方ができるような仕掛けを施すことを目指す。製作については木材等身近で揃えやすく、加工しやすい材料を使用し製作を行う。

## 第5章 実施調査

### 5-1. 調査手法

実際に製作した工作物を街中に設置し、安全面に十分に配慮しながら、利用者を対象にしたアンケート調査を行う。

### 参考文献

- (1)表参道&原宿のローカルメディア OMOHARAREAL  
<https://omoharareal.com/navi/column/detail/80>
- (2)「ホコ天」をもう一度。これからの日本の都市再生  
<https://note.aktio.co.jp/lifestyle/20190705-1210.html>
- (3)東京大学：URBAN DESIGN LAB. MAGAZINE  
<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/blog/docs/vol.333.pdf>
- (4)元木大輔, DDAA: 工夫の連続: ストレンジ DIY マテリアル, 晶文社, 2020
- (5)アフォーダンス-Center for Design Fundamentals Research, Kyushu University  
<https://www.kidnext.design.kyushu-u.ac.jp/cdf/lexicon/146/>